

日本在宅看護学会誌

第2巻 第1号

Vol. **2** No. **1**
OCT. 2013

付 第3回日本在宅看護学会学術集会 プログラム・抄録集

01 巻頭言

在宅看護の学問的發展をめざして
川村佐和子

02 第2回日本在宅看護学会学術集会を開催

04 大会長講演

「変化する在宅看護」
棚橋さつき

シンポジウム1 「安心できる療養生活を支える看護のバトンリレー」
訪問看護、介護施設看護、病院内看護

10 「生活を支える医療につなぐ
～看護マネジメントを体系化（見える化）しよう！」
宇都宮宏子

17 「安心できる療養生活を支える看護のバトンリレー 訪問看護の立場から」
宇野さつき

22 「地域で介護施設の看護が担う役割
～「最期のときまで住み慣れた地域で暮らしたい」
を支えるチームの一員として～」
服部美加

シンポジウム2 「訪問看護の質向上を考える」
～専門特化した看護実践から学ぶ～

27 「専門特化した訪問看護実践の経済評価」
木村憲洋

31 「専門特化した訪問看護の実践：皮膚・排泄ケア認定看護師の実践」
後藤茂美

35 「訪問看護の質向上を考える
横浜市訪問看護連絡協議会における活動実践をとおして」
青木悠紀子

40 会 則

42 投稿規程

44 役員名簿

46 編集後記

47 第2回日本在宅看護学会学術集会プログラム・抄録集



日本在宅看護学会

Japan Academy of Nursing for Home Care

The 3rd Conference Japan Academy of Nursing for Home Care

第3回 日本在宅看護学会学術集会

「在宅療養者と家族により添い支える在宅看護」

プログラム・抄録集



大会長：尾崎章子（東邦大学看護学部）

副大会長：佐野けさ美（スギメディカル株式会社）

高砂裕子（南区医師会訪問看護ステーション）

会期：2013年11月16日（土）

会場：東邦大学看護学部

在宅看護学における知の創出

一質的研究と科学をめぐる誤解を解く一

高木 廣文（東邦大学看護学部長 教授）

ヒトを対象とする研究では、その研究形態により量的研究と質的研究に二分することがある。量的研究の科学性を問題にすることはほとんどないのだが、質的研究の科学性を問題にすることがある。しかし、質的研究の科学性を議論する場合、まず質的研究とは本質的にどのような研究なのかを考える必要がある。そして、さらに科学とは何かを明確にしておかなければならない。

現象の本質論から、私は自然事象（モノ）を研究対象とするのが「量的研究」、心的存在の中に生起する現象（コト）を扱うのが「質的研究」であると大きく区分している。

量的研究は、様々な現象を「測る」ことによりデータを収集するために、客観的であり再現性も高い。一方、人間の心的存在である主観的な内部世界の現象に関しては、共通理解を得ることが極めて困難であり、本来的に対象者からの言語による情報などがなければ、研究を行うことはできない。このように質的研究は、心的存在である内部世界の現象を解明するために行う研究であるといえる。すなわち、『質的研究とは、研究対象者（情報提供者）のある主観的内的世界に関する現象をテキスト化し、研究者が主観的にテキストを解釈し、その現象を再構築する研究である』といえるだろう。

多くの人たちは考え違いをしているのだが、科学とは因果関係を客観的に明らかにすることを目的とするような営為ではない。基本的な科学哲学の考え方であるポPPERの反証主義やクーンのパラダイム論などは科学理論を考える上で有用であるが、私は構造主義科学論の立場から質的研究の科学性を考えている。すなわち、『科学とは同一性（構造や形式）の追求であり、科学理論（モデル）の善し悪しは、目的とする現象をいかに上手に説明できるかによる』というのが私の立場である。このように科学というものを捉えると、特定の現象を説明するために構造、理論、モデル、システムなどを仮定して行う研究は、量的か質的かを問わず科学的な研究と考えられる。しかし、そのモデルにより現象説明が上手いかなければ、他のよりよい理論に変更されることになる。

質的研究で最も批判が集中する主観的であると言われるテキスト解釈の問題についても、最近の言語学の考えを踏まえ、構造主義言語論的なアプローチからその妥当性について考えてみたい。

略歴

昭和 49 年 3 月 東京大学医学部保健学科卒業

昭和 54 年 3 月 東京大学大学院医学系研究科保健学専攻博士課程修了（保健学博士）

昭和 54 年 7 月～55 年 6 月 米国 NIH Visiting Fellow（米国環境保健研究所研究員）

昭和 57 年 4 月～平成元年 7 月 聖路加看護大学助教授

平成元年 8 月～11 年 3 月 文部省（当時）統計数理研究所助教授

平成 11 年 4 月～18 年 3 月 新潟大学医学部保健学科教授

平成 18 年 4 月 東邦大学医学部看護学科教授

平成 21 年 4 月 東邦大学医学部看護学科長

平成 23 年 4 月 東邦大学看護学部長、現在に至る

【学会等】日本学術会議連携会員、日本看護科学学会代議員、日本国際保健医療学会代議員、公益財団法人生存科学研究所専務理事